

ではどんな地名・人名がよく使われているのだろうか。山など全くない大陸的スケールの大平原でも、山に関連した地名がたくさんあるのだろうか。夢はどこまでも広がるようである。

## 浅井さんを思う

柴田孝夫

浅井さんにはじめて会ったのは昭和11年の春。満州事変から4、5年の後で日本もそろそろ国際的緊張の中にあっただが、われわれの学生生活はまだそれほどさし迫ってはいなかった。当時の京都帝国大学では文学部の史学科の中に地理学専攻があったが、入学当初は専攻がきまらず、たゞ史学科の学生であった。私などは京都や奈良の風物が珍らしく、花に祭にうかれ歩いていた日々であったが、浅井さんははじめから地理学専攻の意志がかたかった。つまり地理学専攻のために京都の史学科に入学されていたのである。一年生のうちから暇あれば理学部の滑川教授のもとで気象の観測をされていた。ゾンデの気球を上げてその発信音を聞きつゝ比叡山のかなたに流れ行く気球の話をする時の君の目は輝いていた。他日京都出身の数少ない自然地理学者になられたのも既にこの時に芽生えていたと今になって思うのである。浅井さんの計測の確かさは地質学の中村新太郎先生の巡検の時の傾斜や走行の測定、歩測による地図の作成などにもあらわれていた。四年生の夏、内蒙古の探険隊に加われ調査にその成果があげられたが、つゞいて卒業後満州の建国大学に赴任され気候の研究が進められた。惜しくも敗戦を迎え中断されたのは残念である。浅井さんはそのまゝシベリヤに転送され森林の伐採に従事され、われわれ同級生は君の健康を気づかったが二年後に帰国された。君は意気軒昂であった。先の内蒙古の探険から帰られた時ひどくやせられていたが日ならずして元の豊満な怡幅にもどられた。この体力の強靱さは資源研時代の水温調査のための大井川の茂下りなどにもよく役立ったと思う。あらゆる困難さをのりこえて自身の学究を育てゝ来られたがその素質とその態度を伺い知るために一例をのべよう。

法政大学の時代に一年間、アイスランドの調査に従事された。その滞在中に一通の手紙が届いた。あけてみると謄写印刷であってあちこちがインキでよごれていたが判読出来た。調査の報告の他に印刷法が記されてあった。ビニールの風呂敷の上に印刷インキを塗ってそれに厚紙をおく。次に紙をのせて上から手でたゞく、とあった。アイスランドで謄写版印刷をした浅井さんの当意即妙と合理主義に敬服した。あとで聞くとところによるとアイロンの裏で肉を焼いて食べられたとか。

学生の頃、小山のお宅にお邪魔をしたことがある。部屋にピアノがあってお父様とお母様それに妹御様達が寄ってどなたかがヴィオリンを弾いて家庭音楽会をなさるといふ。一体、浅井さんの体の動きには何やら一定のリズムがある。寒暖計を振られる時とか歩かれる時とか。子供の頃からの音楽的環境がそれを形づくっているのではないかと思う。お父様の学究、いわば浅井さんの出生以前からの血の中の学究がリズムに乗って湧き出したようにも思われる。浅井さんの心のこまやかさ、誠実さもこのリズムの正確さの中にあるようである。私も今まで私の進退などについて幾度かお世話になった。どこまでも行届いていてまことに感謝に耐えない。今後ますます御自身の学問を発展されますよ

う、又よろしく御教導賜りますようお願いする次第である。

## ただいま聴講生です

佐藤由子

学生時代の4年も公立中学教諭時代の10年も真面目に勉強してきたとはいいいにくい私が、11年の専業主婦時代を経て、非常勤講師として教職にもどった時、当然のことながら、劣等感に苦しむ羽目になりました。「悩みがある時は前向きに突破するに限る。」と思ひ、お茶大を訪ね、1科目だけの聴講生の手続きをとったのは、昨年9月でした。(浅海先生や貝山さんがいらっしやったのは幸でした。)

はじめはノートをとる手もふるえる感じで、わからないことだらけ、(細々とでも勉強しておくのだった!)とにかくわかったことだけをノートし、推せんされた論文や本は片っぱしから読み、そのうちに何とかなるだろうという感じで、ひたすら皆勤をめざし、しつこく質問しました。

「なぜ学校に来るのですか。」という問は度々受けました。「昔もいい加減な勉強であった上に、忘れてるし、新しい知識も仕入れないと生徒に申訳ないからです。」と答えていましたが、ある時「食べ物と共に、勉強に飢えて育ちましたので、それを満たすために」と答えてしまってから、これが案外ホンネであることに気がきました。

戦争が末期的症状を呈してきた頃、13才の私は、ヨイトマケで飛行場の整備をしていました。こんなことをしても使わないうちに全滅だと思いながら、ふと急に、「勉強がしたい」「本が読みたい。」「活字に接したい。」「教室にすわりたい。」という思いがつきあげてきて、耐えがたく、涙があふれてきました。……戦後、本屋や音楽会場の前に行列ができたように、「文化」に対する人間の飢えは、空腹のそれにもおとらない苦しみであると、その時実感しました。その後やっと大学には入ったものの、学資だけでなく、生活費も稼がなくてはならない私は、やりたいただけ勉強したということなく卒業し、続いて仕事と育児に追われて過して来ました。

非常勤講師は不安定な身分で、ことに地理は縮小される傾向の今、よい授業をするために勉強しても、先行はわかりません。しかし、私の年来の飢えを満たすための勉強なら、私が意図する限り、放り出される心配はありません。それに、頭は少々老化していても、学生時代より有利なことだってあります。1)就職・結婚・育児などの心配がない。2)恋愛・学生運動に心をときめかすことがない。3)経済的安定。4)何年かかってもよい。5)社会科学は、長く生きてきた方が理解できることもある……等。あと30年余命があるとして、10年位しがみついていたなら、若い人の3~4年分位の勉強はできるかもしれないと、負け惜しみも交えて肯定的に考えることにして、今年も元気よく、教師・学生・主婦をやっています。当初の目的であった劣等感の克服もよい方向にむかっていますし、それにもまして、実生活の経験や見聞が、少しずつ体系づけられ、薄紙をはぐように、明瞭にみえてくる楽しさは、社会科学の一つを選んでよかつたと思わずにはいられないのです。

「巡検があつたら連れていって下さい。」とふれ廻って、もう4回いきました。キャラバンシュー